

# ルールの相違によるバレーボールの特徴 -6人制と9人制との比較-

西野 明<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 千葉大学教育学部

## The Research in Characteristic of the volleyball by the difference in rule -Comparison between six system and nine system-

NISHINO Akira<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、日本のバレーボールの普及・発展に向けた一資料を得るために、日本におけるバレーボールの制度（6人制と9人制）の特徴について検討した。主にルール上の相違点に関して6人制との比較から、認知度及び理解度が低いと思われる9人制の特徴を、筆者の実践経験もふまえて明らかにした。バレーボールという一つの競技ではあるが、サービスの回数（6人制は1回、9人制は2回）、ボールコンタクト（9人制はボールがネットに触れると最大で4回接触可能）、ポジション（6人制はローテーション、9人制はフリーポジション）、コート規格などの点で9人制独自のスキルや作戦が必要になることがわかった。

今後は、バレーボールのさらなる普及・発展のためにも、両制度（6人制と9人制）の特徴を捉えながら、うまく共存できるようにすることが大切である。

キーワード：バレーボール (volleyball), ルール (rule), 6人制と9人制 (six system and nine system)

### 1. はじめに

1895年のウィリアム・G・モーガンにより考案されたバレーボールは、レクリエーション的要素から競技としてルール整備がなされ、これまでオリンピックを始め様々な国際大会が開催され、その人気が続いている。日本において最初にバレーボールが紹介されたときには、1チームの人数が16人制であったが、極東では徐々に9人制になったといわれている。その影響もあり、日本では9人制バレーボールが盛んになったため9人制の競技規則が整備されてきた。その後、国際バレーボール連盟に加盟した日本は、1958年に「1964年東京オリンピック招致」が決定し、欧州で主流となっていた6人制バレーボールを正式競技種目に加えようと、普及と発展に力を注いできた。東京オリンピック開催前までは、9人制バレーボールが国内で中心となり、様々な大会を開催してきた。が、オリンピック後は、国際化に伴い6人制中心の大会が運営・実施され、教育現場でもその影響を受けている。

バレーボールを統括する日本バレーボール協会は、現在においても9人制と6人制の両方を維持する方針を示しており、改めて9人制の必要性が伺える。生涯スポーツの実施に向けては、いくつかの理由により9人制の方が可能性が高いかもしれない。本研究では認知度及び理解度が低いと思われる9人制の特徴を把握し、さらに6人制との類似・相違を認め、さらなるバレーボールの普及・発展に寄与することである。

### 2. 目的

1964年の東京オリンピック以降は、6人制が主流となり、教育現場においても6人制が取り入れられている。多くの人は6人制バレーボールを実践したりテレビ等での観戦により、おおよそのルールは把握していることが考えられる。しかし、9人制においては聞いたことがある程度で、なかなか実践する機会が少ないため、その面白さや楽しさを実感できない状況である。

そこで本研究は、筆者の20年以上実践経験（9人制バレーボール）も含め、現在の日本におけるバレーボールの制度（6人制と9人制）から、それぞれの特徴について検討し、今後のバレーボールの普及・発展に向けた一資料を得ることが目的である。

### 3. 主なルール上の相違点について

前述したように日本バレーボール協会では6人制と9人制を維持し、それぞれ競技規則（ルール）を定めている。この中でも、その相違点についていくつか取り上げ、筆者の経験も踏まえながら、特に9人制の特徴を明らかにする。

#### 1) 登録人数

2018年度のルールによれば、数字が示すとおり6人制はコート内に選手が6人、9人制は9人入ってプレーをする。控え選手は6人制が最大8人（リベロ2人含む）で1チーム14人以内、9人制は最大6人で1チーム15人以内で構成される。1998年のルール改正により6人制で

は守備専門選手（リベロ）の登録が可能になり、1チーム12人以内であった登録人数が変化してきた。9人制では2016年にルール改正が行われる前までは、控え選手が3人で1チーム12人で構成されていた。しかし、昨今の様々な状況（健康や安全面、出場機会など）を考慮して、登録人数を増加させた。両制度ともに、20年前と比較しても、より多くの選手が試合に出場できる可能性がある。

## 2) 用語

表1を参照にすると、6人制では国際バレーボール連盟の決定によるため、日本においてもそれに準拠し、主に英語表記を使用する。9人制では、日本独自で展開されているため、日本語表記と英語表記の混合となる。両制度において「ダブルフォルト」という言葉が使用されているが、6人制での意味は、2つまたはそれ以上の反則が、同時に両チーム選手により引き起こされた場合は、ラリーをやり直すこと。9人制での意味は、サービスの失敗を2回続けたときのこと、であり完全に意味が異なるので注意が必要である。日本バレーボール協会の方針としては、可能な限り用語も統一して、審判や選手、さらには観客の人にも分かりやすくすることを目指している。

表1 6人制及び9人制で用いられている用語

6人制	9人制
サブスティテューション	選手交代
キャッチ	ホールディング
ダブルコンタクト	ドリブル
フォアヒット	オーバータイムス
ダブルフォルト	ダブルファール
ボールコンタクト	ワンタッチ
ラインジャッジ	線審

\*2018年度版 バレーボール9人制競技規則より参照

## 3) コート規格

理由は不明であるが、女子（長辺18m、短辺9m）においてはコートの広さは同じである。男子に関しては、9人制（長辺21m、短辺10.5m）のほうが6人制（長辺18m、短辺9m）と比較して長辺3m、短辺1.5m広く設定されている。また、ネット高さについては、一般男子6人制では2m43cm、9人制では2m38cmとなり5cmの違いがある。一般女子6人制では2m24cm、9人制では2m15cmとなり9cmの違いがある。

筆者の実践経験から、6人制から9人制へ移行したときに、コートは広く感じた。また、筆者はセッターというポジションを主に担っていたため、9人制ではトスを上げる際にもパワーとスキルがさらに必要になると感じた。女子の場合は、6人制と同じコート内を9人がプレーするため、ボールがなかなか下に落ちないといったラリーが継続する試合展開が多く見られる。この点では、観客にとっては面白い要素になっていると思われる。

## 4) ボールコンタクト

基本的に、チームが相手コートにボールを返すまでにプレーすることができる接触回数は3回である。9人制においては、ボールがネットに触れたときは、さらに1回プレーすることができ、最大4回まで接触可能となる。これが決定的な相違点である。そのため、9人制ではこのルールを上手く活用してプレーしている。

筆者の実践経験から、9人制バレーボールの大会では、

いわゆる強豪チームほどネットプレーが上手であり、特にセッターが重要であることがわかっている。なぜなら、セッターはトスを上げる役目であり、相手からの返球に対して、2プレー目でボールを触ることが多くなる。さらに、ネット付近でプレーすることがほとんどで、自チームからの返球が乱れたときに故意にネットへボールを当てて、ボールの状態を整えて、トスを上げることが可能となる。セッターにはこのようなスキルのみならず状況判断が必要となる。はじめて9人制の試合を観戦する人にとっては、いったい何が起きているのかわからないことが多い場面でもある。また、セッターだけでなく、レシーブやオフェンスの失敗をカバーできるチャンスであり、あきらめない状況を作り出すことにもつながる。このネットプレーに関して、筆者は9人制の醍醐味であると考えている。

さらに、6人制ではブロックのワンタッチは接触回数に含まれないため、その後、3回のボール接触が許可されるので、オフェンス有利となる。しかしながら、9人制ではブロックのワンタッチも1回の接触とカウントされるため、その後は2回以内での返球となり、オフェンスを組み立てるのが難しくなる。筆者の実践経験から、レシーバーは素早い状況判断（ブロックのワンタッチがあるかないか）とトスにするスキル（オーバーハンドとアンダーハンド）が重要であると感じている。

表2 選手交代の要領例

1~9を先発選手、10~12を交代選手とし、また数字は選手番号で、そのうち1~9は併せてサービス順を示す。 ①：7→10→7, 8→11, 9→12 ②：8→10→8, 9→11→12 ③：8→10→8, 9→11→9 ④：8→10→11→8→12 ⑤：8→10→8→11, 9→12 ⑥：8→10→11→12→8 ⑦：8→10→11→8, 9→12 ⑧：8→10→8→11→12
--

\*2016年度版 バレーボール9人制競技規則より参照

## 5) 選手交代

選手交代に関しても、2016年度までは、6人制と9人制では大幅に異なっていた。表2に示したように、9人制では最大4回の選手交代が可能であった。6人制では最大6回である。6人制においては、控え選手は先発選手と交代した場合、同じ選手と交代してベンチに戻らなければならない。表2の③に相当する交代しかできないのである。一方、9人制では、表2に示したように、6人制以外での交代も可能であった。そのため、選手のみならず監督やコーチは、選手交代の方法を正確に把握し、チーム戦略を立てることが要求される。この選手交代に関しては、審判も理解することが難しく、9人制独自のルールであったが、数年前から「9人制競技の特性を保持しつつ、審判上の取り扱い可能な限り6人制と共通にする」という基本的な考えの下、様々な講習会で検討され、変更になった。前述したように2017年度から9人制では登録人数をこれまでの3人から6人に増加させ、選手交代を6人制と同様に6回とし、同じ選手との交代のみとなった。これまでのような変則的な交代は禁止された。

筆者の実験経験からも、選手交代に関しては、試合をする上でとても重要な要素となる。いわゆる自チームに有利な試合の流れを継続したり、自チームに不利な試合の流れを断ち切るなどの効果が認められている。これまでの9人制の変則的な選手交代ができなくなったのは、少し残念である。

#### 6) サービス

サービスに関しては決定的な相違点がある。6人制は1回のみである。9人制は2回まで可能である。6人制では、2000年のルール改正により、ネットインが認められた。9人制ではネットインはフォルト（反則）になる。そのため、9人制では1回目にリスクを伴うジャンプサーブなどを試みるが多くなる。パワフルなサーブで相手のレシーブを乱し、自チームの攻撃が有利になるような作戦である。

また、6人制ではローテーションに基づきサーブ順が決められている。9人制ではローテーションが存在しない（フリーポジション）ため、試合が始まる前に、サーブ順を決めて提出する。筆者の実験経験から、基本的にはサーブの質・量が良いと考えられる選手から順番に配置されることが多い。

#### 4. まとめ

本研究では、9人制バレーボールの特徴を理解するために、6人制との比較から検討を行った。その結果、日本におけるバレーボールが独自の発展や進化、さらには国際化に伴う普及・発展がみとめられた。その中でも、9人制は6人制との相違点を強調しつつ、一つのバレーボール競技として確立し9人制のバレーボールの特徴がもつ楽しさや難しさが見えてきた。

6人制は国際バレーボール連盟が開催する2年に1回の会議でルールが検討されている。9人制は日本独自の競技で、その特性を生かしながらかつたが、国民体育大会での廃止、審判上の課題なども含め、ここ数年で大きく変化してきた。今後のバレーボールの普及・発展には6人制と9人制の共存が必要不可欠である。

最後に、6人制の主な国際大会は、オリンピック、世界選手権であり、テレビなどで観戦可能である。一方、9人制の主な国内大会は、全日本9人制バレーボール総合選手権大会、全日本9人制バレーボール実業団選手権などがあるが、ほとんどテレビなどでは放映されないため、機会があれば、ぜひ会場に足を運んで観戦し、9人制の面白さを体感して頂きたい。

#### 【引用・参考文献】

今丸好一郎（1999）9人制バレーボールのゲーム分析-

女子トップレベルを対象にして-, 東京女子体育大学紀要, 34, 89-93

古瀬由佳・塚本博之・窪田辰政（2013）大学バレーボールにおける戦術に関する研究-ルール改正に伴うレセプション成功率の比較-, 静岡産業大学情報学部研究紀要, 16, 223-234

古瀬由佳・塚本博之・湯澤芳貴（2016）9人制バレーボールにおける戦術に関する研究, 日本体育学会第67回大会予稿集, 269

森田信博（2014）日本におけるバレーボールの普及と極東競技選手権大会について, 秋田大学教育文化学部研究紀要, 69, 25-36

西野明（2010）9人制バレーボールにおける国体候補選手の心理的競技能力について, 千葉大学教育学部研究紀要, 58, 183-186

西野明（2011）9人制バレーボール選手の心理的競技能力の変容とスポーツ競技不安との関係について, 千葉大学教育学部研究紀要, 59, 137-141

西野明（2014）セッターの心理戦, Coaching&Playing Volleyball, 8-11

坂井充・八板昭仁・北田豊治・得居雅人・船津京太郎・泉川貴子・宮田陸美（2003）バレーボールのゲームにおけるリベロプレイヤーのレシーブとラリー継続回数との関係, 九州女子大学紀要, 40（2）, 61-69

吉田康伸（2003）バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化についての研究, 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要, 21,23-26

吉田康伸・米山一朋・浜口純一（2007）バレーボールにおけるラリーポイント制とサイドアウト制の違いについての研究, 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要, 25,35-38

吉田康伸・浜口純一・増山光洋・山田快（2011）バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化についての研究②, 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要, 29,11-14

2018年度版 バレーボール6人制競技規則 公益財団法人日本バレーボール協会

2018年度版 バレーボール9人制競技規則 公益財団法人日本バレーボール協会

2017年度版 バレーボール6人制競技規則 公益財団法人日本バレーボール協会

2017年度版 バレーボール9人制競技規則 公益財団法人日本バレーボール協会

2016年度版 バレーボール6人制競技規則 公益財団法人日本バレーボール協会

2016年度版 バレーボール9人制競技規則 公益財団法人日本バレーボール協会